



第 36 回 日韓技術士会議報告

技術士（水産／総合技術監理部門）
・ APEC エンジニア
桑 原 伸 司

1. はじめに

2006 年 11 月 12 日(日)～14 日(火)に沖縄県那覇市で開催された第 36 回日韓技術士会議に参加してまいりました。自分自身にとって、『日韓会議』は初めての参加です。以下、会議の内容等について報告いたします。

2. 日韓技術士会議とは

初めての参加でしたので、最初に日韓技術士会議の生い立ちについて述べさせていただきます。日韓技術士会議は、1971 年に韓国で第 1 回会議が開催され、翌年は日本でと日韓交互に開催され現在に至っています。開催当初は日韓技術士の友好親善が主な目的でしたが、その後、技術士法の比較研究、技術移転や産業安全をテーマにした共同研究もすすめられ、現在では分科会が常設され国際会議としての成熟期に入っています。

日本ではこれまでに、東京、新潟、札幌、松江、千葉、福岡、仙台、米子、そして今回の那覇と日本各地で開催され、参加者も数百人規模となり、日韓技術士の関心が高まっています。

3. 会議の概要

(1) 開催日程

・ 11 月 12 日(日)：南風原町立黄金森陸上競技場

〈第 2 回日韓青年技術士サッカー大会〉

国際色豊かな素晴らしい企画です。何かと力が入る日韓サッカー。私は移動日のため観戦できませんでしたが、熱闘が繰り広げられたようです。結果は仲良く？引き分けで終わりました。

・ 11 月 13 日(月)：那覇市ホテルロイヤルオリオン

〈本 会 議〉 09：00～12：00

〈分 科 会〉 13：00～17：00

〈晩 餐 会〉 18：30～

〈レディースコース〉 10：00～15：00

・ 11 月 14 日(火)

〈研修旅行：オリオンビール工場など〉

(2) 参加者

会議の参加者は下表の通りで、総参加者数は 322 名でした。北海道からは、日本技術士会北海道支部長の大島紀房氏（応理・総監）、日韓技術士会議実行委員会委員の市村一志氏（建設）、筆者の計 3 名が参加しました。

表－1 参加者内訳

	合 計	本会議	レディースコース	晩餐会
日 本	133	106	27	106
韓 国	189	91	98	189
合 計	322	197	125	295

今回の参加者に配られるネックホルダー（参加証入れ）には日韓会議にふさわしい工夫がされていました。ストラップの色が、サッカーのナショナルチームにちなんで？韓国が赤、日本が青です。前日にサッカー大会が開催されたこともあり、この色分けには密かに感心しました。

(3) 大会テーマ

今回のメインテーマは、「社会開発における技術士の役割 ― ものづくりの心 ―」です。午前の全体会

議のでは、開会式典の後、このメインテーマについて日本側からは垣内 直氏（建設・上下水道）、韓国側からは李 康鎬氏（化工部門）と日韓双方から基調講演が行われました。

(4) 分科会

午後は 5 つの分科会に分かれ、講演・討議が行われました。各分科会のテーマは以下のとおりです。

第 1 分科会：観光・環境・資源エネルギー

第 2 分科会：建設と安全

第 3 分科会：技術者資格と教育（倫理・CPD）

第 4 分科会：英語討論（自由課題）

第 5 分科会：日韓青年技術士討論（自由課題）

筆者はそのうちの第 3 分科会に参加しましたので、その概要を報告いたします。第 3 分科会では、韓国側から韓国技術士会副会長の許 楠氏（放射線管理・非破壊検査）ほか計 4 名、日本側から宮原宏氏（建設）、橋本義平氏（情報工学）の計 2 名、合計 6 名の講演と、活発な質疑・意見交換が行われました。



写真－1 第 3 分科会

その中で興味を抱いた一つが韓国の技術士制度です。韓国では 1963 年に技術士法が制定され 13 の技術部門が設けられました。その後何度かの小さな改正が行われ、現在は部門や試験制度を含めた大がかりな改正準備が進められています。特に技術部門では当初の農業・水産・電気・機械・化工・繊維・金属・鉱山・船舶・航空・機械・建設・応理の 13 部門でしたが、これを土木・構造・地盤・環境・機械・

電気・鉱山・産業・化学・情報・生命・消防・油類・航宇・Building System、の 15 部門に再編成しようとしていることです。これは APEC エンジニアの部門を意識しているとのことでした。

また技術士法が制定された当時は、技術士の数が少なくその不足を補うため暫定的に認定技術士（試験無し）という制度を設けました。その数は 20 万人にものぼり、いまではこの措置が何かと混乱を生じさせていることから認定技術士のあり方や試験制度・継続教育についても見直しも併せて検討しているとのことでした。

韓国の技術士法の中で、特に関心を持ったのは、『技術士の実名化』についてです。1992 年の改定では、成果に対する責任の所在を明確にする目的で、韓国では担当した技術士の『署名・捺印』を義務付けています。責任を明確にすることで職務改善・地位向上・技術力向上も期待できます。

韓国側では部門の見直しを行うなど、APEC エンジニアや EMF（国際登録技術士）と同程度の資格を整備しています。これは国家間の資格相互認証に沿った流れの一つです。その背景には、近い将来、韓国・中国・日本を中心とした東アジアで EU にも匹敵する巨大な経済コミュニティーが形成されるであろうことを想定しているからです。

日本と韓国の間では、現在まだ FTA（Free Trade Agreement：自由貿易協定）の締結には至っておらず、日韓ですら技術者の相互認証は実現していません。しかし近い将来、技術士＝東アジアを飛び回る…が常識になる日が来ると思います。そのためにいま出来ること…やっぱり語学力だと痛感しました。

(5) 日韓水産協議

日韓会議の場を利用し、筆者の所属する日本技術士会水産部会と韓国水産技術士との会議を行いました。その目的は、APEC エンジニアに水産部門を設立するよう日韓の意見を調整し、2007 年に開催される APEC エンジニア調整会議に共同提案をするためです。

参加者は、韓国側からは金 又俊氏（水産製造：前麗水大学校教授）、日本側からは関根幹男（水産部

会長）と筆者（副部会長）の計３名でした。

最初の顔合わせということもあり、今回は日本側からの趣旨説明と協力の要請にとどまりましたが、2007年５月までに相互協議会を開くことを確認しました。



写真－２ 日韓の水産系技術士協議（中央が金氏）

(6) 晩餐会

晩餐会の参加者は、総数 295 名と主催者側の予想を大きく上回り、会場を２箇所に分けて行う異例の事態となりました。幸いにも筆者はメイン会場に席がありましたが、サブ会場では挨拶やイベント等がテレビ画面に映し出されるというパブリックビューイング的な状況となり、いささか寂しい感があったのは否めませんでした。

途中からはサブ会場の方々の乱入？もあり、沖縄舞踏や、韓服（チマ・チョゴリ）を身にまとった韓



写真－３ 舞、舞、舞…

国側ご婦人による大コーラスなど、宴が進むにつれて交流の速度もグンとアップしていきました。

４．第 37 回 韓日技術士会議

晩餐会の最後では、第 37 回韓日技術士会議（韓国側では『韓日』）の開催アピールがありました。来年は首都ソウルでの開催とあって、ソウルのプロモーションビデオが大画面に流れるなど、『新しく変わったソウル！』を盛んにアピールしていました（新しい…空港が新しいからでしょうか？ 私の勉強不足です）。



図－４ 運行管理システム構成図

５．おわりに

今回は北海道からは最遠の地である沖縄開催とあってか、日本国内といってもどこか異国情緒を感じる会議でした。

初めて参加した日韓技術士会議ですが、参加者の多くがこれまで何度も参加されお互いに面識があり、親交を毎年深め合っている感じがしました。また日韓の技術交流に対しても大変熱心にご議論・ご討議されており、その交流の歴史の深さを垣間見ることが出来ました。来年はソウルでの開催ですが、多くの方々に是非一度参加されることをお勧めいたします。

最後になりましたが、初参加で戸惑うなか、大島支部長、市村実行委員が参加されていたことが大きな励みになりました。大変お世話になりました。有難うございます。